

研究主題

自らの思いや願いを心豊かに表現する力をはぐくむ
～「自己の確立」と「共生・共創」の教育活動を通して～

研究主題設定の理由

平成14年度からの完全学校週5日制の実施に伴い、各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開しながらも、新学習指導要領にあげる「生きる力」の育成を最重要課題として、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること、②自ら学び、自ら考える力を育成すること、③基礎基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること、などが求められている。

その中でも強調されている視点として、[心の教育]「豊かな表現力の育成」があり、教育課程審議会答申においても、豊かな人間性や社会性を育てるための基本的な力として押さえられている。しかし、昨今の子どもたちの実態としては、自己中心的な考え、思いやりの欠如、責任感の欠落、自己正当化といった傾向が多く見られるなど、数多くの問題点が指摘されている所である。

本研究委員会では、中教審答申の6項目に関してより具体的な観点で、後志の児童生徒の「豊かな人間性」に関わる実態調査アンケートを実施した。その結果、

- ①「正しいと思うことを勇気を持って行なうことができる」「自分の意見をはっきり主張する」といった《自己の確立》の低下
- ②「誰に対しても差別・偏見を持つことがない」「相手の立場になって考えることができる」といった《共生》の希薄

という傾向が見られた。急激な社会の変化に伴う子どもたちの様相に、学校教育がどのように応えていかなければならないのか抱えている問題は大きい。

だからこそ、自分の考えや思いを的確に表現する力や社会の変化に主体的に対応し行動できるための《心豊か》に学び、《表現する力》の育成が必要であると考えます。

「豊かな表現力」は、人間としてよりよく生きるために不可欠な力であり、個々の心の中にある様々な思いや考えを外に表す時、それが多様であればあるほど、表す内容も多様になる。

また、人間は表現し合うことによりコミュニケーションを図り、相互の理解を深めながら生活したり、協同して新たなものを創り出したりする。つまりは、人間らしい心の交流や創造的な営みの根源には、豊かな表現力が存在すると考える。

よって、副主題にあるように、《自己の確立》《共生・共創》をキーワードにしながら、「心の教育」をより充実させ、子どもたち一人ひとりに豊かな人間性を育む教育活動を推進するために、本研究主題を設定した。

研究の仮説

「自己の確立」や「共生・共創」の場を、意図的かつ効果的に(教育活動の中に)も設けることにより、心豊かに生き生きと表現し合う子どもの姿を見ることができる。

本研究委員会では、「豊かな人間性」においては、＜豊かな心＞だけでなく、＜確かな行動力・実践力＞が伴ってこそ培っていけるものであると考える。故に、「豊かな人間性の育成」という大命題のもと、一つの切り口として「豊かな表現力」と設定した。

しかし、「豊かな人間性の育成」＝「表現力の育成」という単層構造ではない。また「表現力の育成」＝「コミュニケーション能力の育成」といった技術的な能力をさすものでもない。

そこには、「豊かな表現力」を伴う《学びの共有化》《感動》《充実感・成就感》などを体験することにより、心の交流が図られ、「豊かな人間性」をはぐくむことにつながると考える。

そこで、「豊かな表現力」育成の場として、次のような視点を設けてみた。

「自己の確立」が図られる場作り

- 自分の考えや意見をもつ
- 自分のよさに気づく
- 自分に自信をもつ
- 自分の生き方を高める

「共生・共創」が図られる場作り

- 相手の存在を意識する
- 立場の違いを理解する
- お互いの良さを生かし、共に高まる
- 新たなものを創る



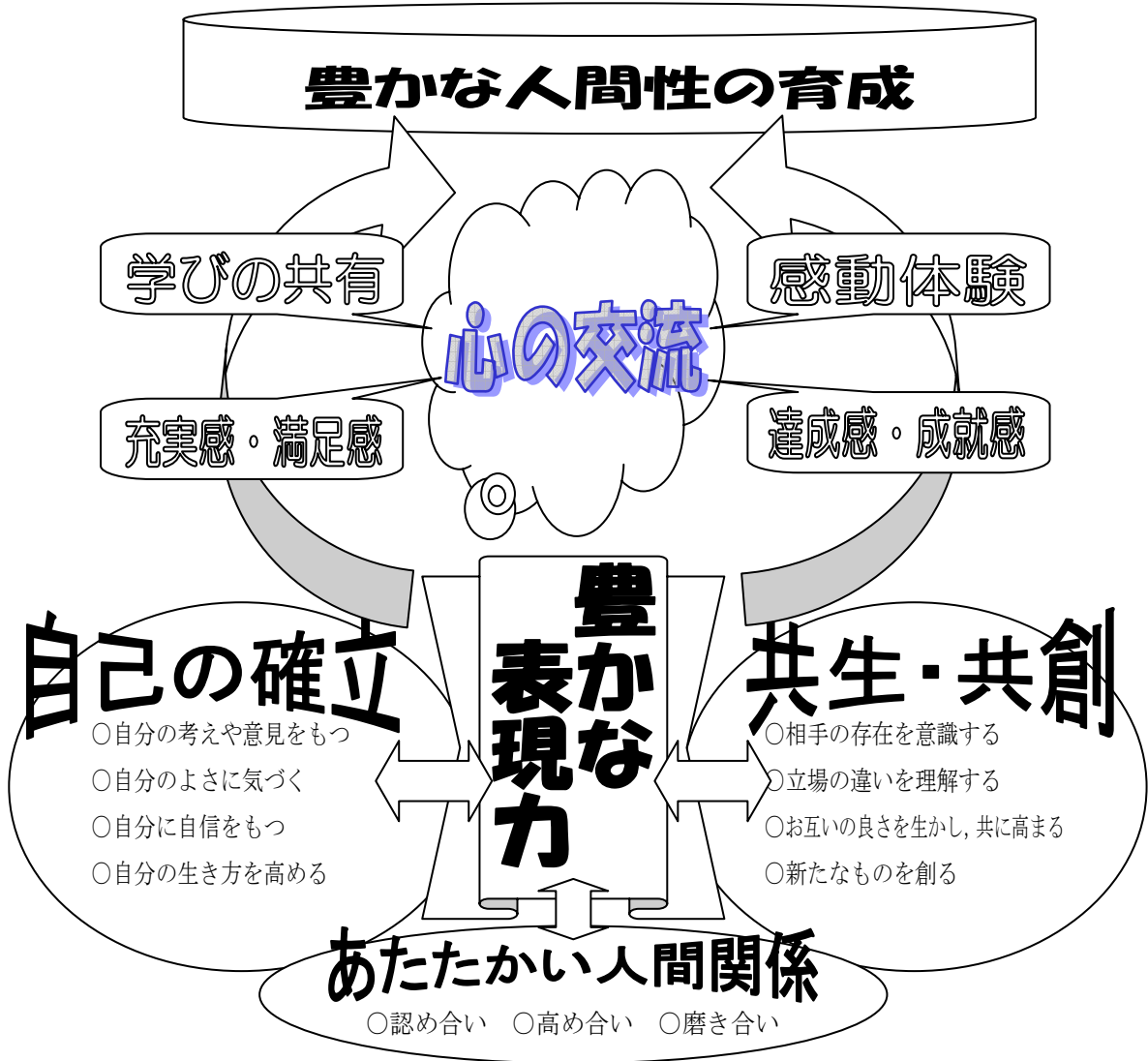
後志の実態調査アンケート結果からもわかるように、「自立心・自己抑制力・責任感」の低下や「他者との共生や異質なものへの寛容」の欠落が見られる。従って、『自己の確立』や『共生・共創』を視点としながら、人間関係の醸成する場として意図的かつ効果的に設定していくことが必要であると考えます。

そして、そうした場を設定することにより、①自己の表現力を高め、②お互いに表現をし合い、③認め合い高め合う、といった「心豊かに表現する(し合う)姿」が見られ

ると考える。

技術的な表現能力に偏ることなく、お互いを認め合う人間関係や表現しようとする態度といった部分に視点をおきながら、「表現力」を高め、豊かにすることが、子どもの変容を促し、本研究主題である『自らの思いや願いを心豊かに表現する力』の育成、ひいては『豊かな人間性』を育てることができる。

研究構造図



研究の視点

『道徳』で検証するにあたって、『道徳における指導方法の工夫』『自己の確立、共生・共創の場づくり』という研究内容の視点をより具体的なものにした。

【 研究の視点① 】

子どもの問題意識を誘発し、学習に対する意欲を高める教材との出会いや単元構成の工夫

●学習素材の工夫

- (1) 日常生活や身近にあることなどを活用する
- (2) 学年・学級の実態や発達段階に応じた素材を教材化する

●教材づくりの工夫

- (1) 視聴覚に訴える教材づくりをする
- (2) 発達段階に応じ、動作化、ペープサート、役割演技などを積極的に活用する
- (3) 実態に合わせた資料を提示する（モラルジレンマ資料の活用など）

【 研究の視点② 】

一人ひとりを大切にし、子どもの学びをより主体的なものに高める学習過程や教師の支援

●学習過程の工夫

- (1) 写真や絵、具体物などを提示する
- (2) ワークシートの活用 → 自分の考えを持つ
- (3) ネームカードなどの活用 → 話し合い活動の充実
- (4) 発問の工夫 → 子どもの考えを効果的にゆさぶり、きりかえ、ひきだす発問

●場面設定の工夫（モラルジレンマ場面の設定（葛藤を起こさせる）など）

- （ 【限定された状況設定】 → 【立場を明確にした話し合い】 → 【道徳的価値へ迫る】 ）

【 研究の視点③ 】

一人ひとりの良さや可能性を共感的、継続的にとらえ、次の学習や生活に生かす評価

●授業の最終場面の効果的な在り方（道徳的価値に気づく、しぼる、ひろげる）

- (1) ふりかえり、自己評価
- (2) 教師による評価（判断したこと、深く考えたことへの価値付け）
- (3) 次の学習や生活に生かす評価（日々の道徳的実践力へ）